

河合隼雄著

# 子どもの宇宙



岩波新書

386



boreas

eurus

河合隼雄 著

# 子どもの宇宙

岩波新書

boreas

## 河合隼雄

1928年兵庫県に生まれる

1952年京都大学理学部卒業

1965年ユング研究所(スイス)よりユング派分析  
家の資格を取得

専攻—臨床心理学

現在—京都大学教育学部教授

著書—「コンプレックス」(岩波新書)

「母性社会日本の病理」(中央公論社)

「昔話の深層」(福音館)

「大人になることのむずかしさ」(岩波書店)

「子どもの本を読む」(光村図書出版)

「昔話と日本人の心」(岩波書店)

「宗教と科学の接点」(岩波書店)

「明恵 夢を生きる」(京都松柏社)

子どもの宇宙

岩波新書(黄版) 386

1987年9月21日 第1刷発行 ©

定価 480 円

著 者      かわ      い      はや      お  
                 河      合      隼      雄

発 行 者      緑      川      亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5  
発 行 所      株式 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan  
ISBN 4-00-420386-4

# 目次

はじめに ..... 1

I 子どもと家族 ..... 9

1 憎まれっ子 ..... 12

2 家出願望 ..... 22

3 変革者としての子ども ..... 30

II 子どもと秘密 ..... 39

1 秘密の花園 ..... 42

2 秘密の意義 ..... 48

3 秘密の保持と解禁 ..... 52

4 秘密の宝捜し ..... 60

III 子どもと動物 ..... 71

1 動物の知恵 ..... 74

2 登校拒否症と犬 ..... 79

3 ファンタジー ..... 88

IV 子どもと時空 ..... 99

1 時とは何か ..... 104

2 通路 ..... 113

3 雲の上から ..... 119

4 日本と西洋 ..... 126

V 子どもと老人 ..... 131

1 導者としての老人 ..... 134

2 導者としての子ども ..... 140

3 トリックスター ..... 148

|      |           |        |     |
|------|-----------|--------|-----|
| VI   |           | 子どもと死  | 155 |
| 1    | 子どもは死を考える | 158    |     |
| 2    | 死者を弔う     | 165    |     |
| 3    | 死の意味      | 171    |     |
| VII  |           | 子どもと異性 | 179 |
| 1    | 異性のきょうだい  | 182    |     |
| 2    | 星の王子様     | 190    |     |
| 3    | 異性への接近    | 196    |     |
| 注    |           | 207    |     |
| あとがき |           | 213    |     |

## はじめに

### 子どものな かの宇宙

この宇宙のなかに子どもたちがいる。これは誰でも知っている。しかし、ひとりひとりの子どものなかに宇宙があることを、誰もが知っているだろうか。それは無限の広がりと深さをもって存在している。大人たちは、子どもの姿の小ささにく、惑わされて、ついその広大な宇宙の存在を忘れてしまう。大人たちは小、さい、子どもを早く大、き、く、しようと焦るあまり、子どもたちのなかにある広大な宇宙を歪曲してしまったり、回復困難なほどに破壊したりする。このような恐ろしいことは、しばしば大人たちの自称する「教育」や「指導」や「善意」という名のもとになされるので、余計にたまらない感じを与える。

私はふと、大人になるということは、子どもたちのもつこのような素晴らしい宇宙の存在を、少しずつ忘れ去ってゆく過程なのかとさえ思う。それでは、あまりにもつまらないのではなからうか。

## 宇宙からの 発信

子どもたちの澄んだ目は、この宇宙を見すえて、日々新たな発見をしている。しかし、残念なことに、子どもたちはその宇宙の発見について、大人たちにはあまり話してくれない。うっかりそのようなことをすると、無理解な大人たちが、自分たちの宇宙を破壊しにかかることを、彼らが何となく感じているからだろう。それでも、子どもたちの宇宙からの発信に耳を傾けてくれる大人を見出したとき、子どもたちは生き生きとした言葉で、彼らの発見について語ってくれるのである。

かみさま

やましたみちこ

かみさまはうれしいことも

かなしいこともみなみています

このよのなか

みんないいひとばかりやったら

かみさまもあきてくるんとちがうかな

かみさまが

かしこいひとあほなひとをつくるのは  
たいくつするからです<sup>(1)</sup>

これは小学一年生の詩である。やましたみちこさんの宇宙に存在している神様は、なんと素晴らしい神様だろう。私はこの詩を、現代の世界で、正義のためには戦争も止むなしといきまいている多くのファンダメンタリストたちに見せてやりたい。彼らの神が肩をいからせ、まなじりを決して、正義のための大量殺人をも辞せずと言っているとき、やましたさんの宇宙の神様は、見事な自然体で、世のなかいろいろあっていいのじゃないの、とゆったりと構えているのである。やましたさんは小学校一年生なりに、どうして世のなかには、嬉しいことばかりでなく悲しいことがあったり、善い人だけでなく悪い人もいるのだろう、と考え続けているうちに、自分のなかの宇宙に存在する、このような神の像を見出したのだろう。

こんな詩を見て、面白いからうちでも作らせようとされてもうまくいくとは限らない。よい詩が生まれるには、その土壌として、あくまで子どもの宇宙に開かれた教師の態度が必要なことを忘れてはならない。

もうひとつ子どもの詩をあげてみよう。小学二年生の詩である。

おとな

中谷 実

だれか人がくると  
ぼくを見て

「大きなりはったね」

「もう何年生です」

「こんど三年」

「そう早いもんね、

こないだ一年生やと

思っていたのに」

といってあたまをなでてくれる

おとなは

みんなおなじことをいう<sup>(2)</sup>

子どもはそのなかに無限の宇宙をもっているのに、大人はそれにまったく気づかず、「みんな

なおなじことをいう。「大きなりはった」と言って頭をなで、大人たちは子どもと「対話」をしたと思ったり、「可愛がってやった」と思ったりしている。しかし、何のことはない。子どもの方はちゃんと大人を観察して、そのステレオタイプを見抜いているのである。子どもの目は透徹して世界を見ている。

## フツウのこと

子どもたちの詩があまりに素晴らしいので、多くの人に読んでもらいたいと思い、「職業、年齢を問わずだれにでも、ともかく一度読んでくださいとすすめたくなるような本」ということで、ある雑誌に子どもの詩の本について書いたことがあった。それを、私のところに心理療法を受けに来ておられる人（成人）が読まれて、次のように言われた。

「それでも、あれはフツウのことでしょう。」

この言葉は私の心に強く響いた。それは、私があの本をできるだけ多くの人に読んで欲しいなどと宣伝しているが、その内容はまったく「フツウ」のことではないか、という意味合いがこめられていた。私はこれに対して、「フツウのことを知らない人があまりに多すぎるのでね」と答えた。本書の執筆にあたって、このエピソードがすぐ心に浮かんできた。それは本書をどのように書くか、いったい何が書けるのか、という点で反省を強いるのである。

## 悲痛な叫び

私は心理療法という仕事を通じて、多くの子どもにも大人にも会ってきたし、そのようなことについて報告を受けたり、指導をしたりすることを長年にわたって続けてきた。そして、私は実に多くの子どもたちが、その宇宙を圧殺されるときに発する悲痛な叫びを聞いた。あるいは、大人の人たちの話は、彼らが子どものときにどれほどの破壊を蒙ったか、そしてその修復がいかに困難なものであるか、ということに満ちていた。彼らの発する悲痛な叫びや、救いを求める声はまったく無視されたり、かえって、「問題」だという判断のもとに大人たちからの圧迫を強めるだけに終ったりした。本書を書こうとする私の主要な動機は、そのような宇宙の存在を明らかにし、その破壊を防止したいからに他ならない。

## 宇宙を語ることの難しさ

ところで、私が推薦した子どもたちの詩が、「フツウのこと」だと言った人は、何を言いたかったのだろうか。「子どものなかに宇宙がある」とは、冒頭に述べたことである。しかし、宇宙は途方もなく広いのである。私の家の庭も「宇宙」の一部であるが、何億光年の彼方に存在する恒星も「宇宙」の一部である。宇宙について述べると言っても、私自身の日常生活を語ったとしたら、それは確かに宇宙の話の一部であることは間違いないにしても、それをもって「宇宙」を語ったというのは、あまりにおこがましいことになるだろう。子どものなかの宇宙も、あまりにも広いものなので、それについてどれ

だけのことが語れるのか。それに、どれだけ説得力のある論が展開できるか、なかなか自信がもてないのである。

子どもたちの詩集が「フツウのこと」を語っていると言った人は、自分の体験から、子どもの宇宙がもっと広く深いものであることを知っており、私がそれを知っていながら、どうしてもあのようなフツウのことを書いた本を多くの人に推薦するのかという気持ちをこめて言っている。私はフツウの人間である。ただ、フツウにしては少しフツウでないこともわかる人間として、心理療法などをしているのだが、このフツウでないことを一般の人々に知っていただくのは、あんがい難しいのである。それに「子どもの宇宙」という点に関しては、フツウのこととも知らない人があまりに多いので、それについて語るだけで十分という気もしてくる。

それでも宇宙などという大きい題をつけた以上は、少しはフツウでないことも話さねばならないと思う。ただ、このような話を理解できるようにすることは、なかなか困難なことである。それについて自分がどれほどの能力をもっているか疑わしいのだが、精いっぱい努力してみることにしたい。幸いにも児童文学の名作には、子どもたちの宇宙について素晴らしい記述がなされている。それに、最近では、子どもに対する心理療法の事例も相当に発表されて、多くの素材が提供されている。これらのことを用いて、何とかこの大きい仕事に挑戦してみたい。結

局のところは、フツウの話になってしまいそうな予感もするのだが、その点については、読者の御判断にまかせることにしよう。

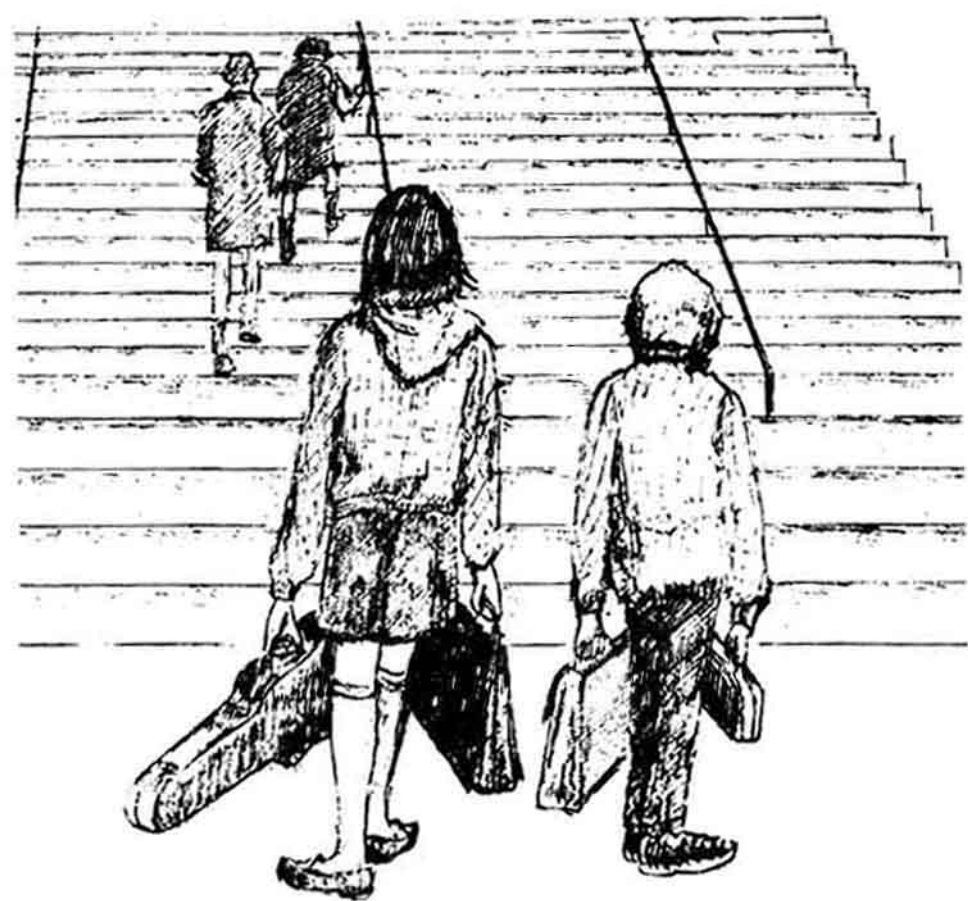
### 大人になること

大人になるということは、子どものときにもっていた素晴らしい宇宙の存在を忘れることではないか、と先に述べた。実際、われわれ大人もそのなかにそれぞれが宇宙をもっているのだ。しかし、大人は目先の現実、つまり、月給がどのくらいか、とか、どうしたら地位があがるか、とかに心を奪われるので、自分のなかの宇宙のことなど忘れてしまうのである。そして、その存在に気づくことには、あんがい恐怖や不安がつきまったりもするようである。

大人はそのような不安に襲われるのを避けるために、子どもの宇宙の存在を無視したり、それを破壊しようとするのかも知れない。従って、その逆に子どもの宇宙の存在について、われわれが知ろうと努力するときは、自分自身の宇宙について忘れていたことを思い出したり、新しい発見をしたりすることにもなる。子どもの宇宙への探索は、おのずから自己の世界への探索につながってくるのである。このようなことについても配慮しながら、子どもの宇宙について考えてみることにしよう。

# I

## 子どもと家族



『クロードの秘密』より



ほし

原 ひろし

おほしさんが

一つでた

とうちゃんが

かえってくるで<sup>(1)</sup>

## 二つの星

この詩の作者、原ひろし君は二歳である。この短い詩は、ひろし君とお父さんの関係を、そして、ひろし君の宇宙空間のひろがりを見事に描いている。二歳の坊やのひろし君にとって、とうちゃんは空に輝き出てくる星であり、そして、おそらく、この父親にとって、ひろし君は希望の星なのであろう。二つの星は宇宙のなかで輝きあい、交信し合っている。この詩を読んで、思わず微笑が浮かびあがってくるのを感じる人は多いことであらう。

## 家族の意味

家族の  
つ意味  
しかしながら家族の関係は、誰もが、いつもこのような関係にあるとは限らない。ひとつの屋根の下に住み、血のつながりがありながら、互いに憎しみ合ったり、深